The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | アイロニーの言語学 |
| Author(s) | 河上, 誓作 |
| Citation | 待兼山論叢. 文学篇. 1998, 32, p. 1-16 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/47941 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# アイロニーの言語学*

河上誓作

## 1．序

はじめに、アイロニー（皮肉）に関わる言語現象を観察してみよう。

(1) Bに裏切られたAが、それを知っているCに「Bはほんとにいい男だ」と言う。

(2) 彼は私に皮肉を言った。

(3) 近畿勢同志のうえ、皮肉にも、2チームしか宿泊していない同宿校の対戦となった。

(4) 世辞や謙遜の表現に皮肉っぽい要素が感じられる場合。

(1)のAのセリフは典型的なアイロニーの表現である。(2)の「皮肉」は(1)のAのセリフのようなアイロニーの表現を指す場合と、単に「いやみ」を指す場合がある。(3)の「皮肉にも」は、(1)や(2)とは異なる意味だが、同じ「皮肉」ということばが使われている。(4)の「世辞」や「謙遜」の表現は、用い方に注意すれば聴き手に不快感は与えないが、程度を超すと皮肉っぽい効果が現れてくる。

本稿の目的は、(1)〜(4)の言語事象がいずれも「皮肉」ということばと関係する事実に着目し、これらの言語事象を統一的に関連づける理論を試みることである。これまでにもアイロニーの表現に対する言語学の側からの考察はなされてきたが、たいていは「言いたいことの逆を言う表現」と

いう類の説明が多く、これだと(3)のような例は説明できなかった。本稿の仮説は、アイロニー（皮肉）に関わる言語事象は非言語的な認識のレベルに関わるもので、言語のレベルだけでは説明できないこと、また、(1)〜(4)のいずれの言語現象も、私たちの心の中にある「外観認識（または先行認識）と実体認識（または現実認識）の反対関係的な偽の構造」に還元できるものであるとする［河上（1993b）］。つまり、(1)〜(4)はいずれも、私たちの認識のレベルにおいて、「アイロニー（皮肉）の構造」に関わる言語現象であると説明する。

なお、「アイロニー」と「皮肉」はほぼ同じ意味と考えてよいが、厳密に言うと、私たち日本人にとっては、「皮肉」は「いやみ」のニュアンスがやや強い感がある。そこで本稿では、以下「皮肉」の代わりに、そうしたニュアンスのない「アイロニー」を用いることにする。この方が、「外観認識と実体認識の反対関係的な偽の構造」を指すのにふさわしいと思うからである。というのは、後で述べるように、アイロニーの表現には「いやみ」の効果もあれば「笑い」の効果もあるが、反対関係的な偽の構造そのものは、そうした効果に対し中立的であるからである。

本稿の構成であるが、まず第2節で simulation（擬態）と dissimulation（偽装）という概念を導入し、アイロニーの本来の意味に立ち返ってその本性を探り、古典的なアイロニーの原義を認識構造で説明する。第3節では「皮肉を言う」という表現のもつ二義性に言及し、発話行為論の立場から、アイロニーの発語内行為（illocutionary act）と「いやみ」や「笑い」などの発語媒介行為（perlocutionary act）との違いを明確にすることによって、「皮肉を言う」という表現の二義性を説明する［例文(2)に関係］。第4節では、典型的なアイロニーの表現として2つのタイプのアイロニー表現（偽善型と偽悪型）を考察し、各々の特徴を探る［例文(1)に関係］。第5節では、日常交わされる最も一般的なアイロニーのタイプ

について考察し、アイロニーの表現がコミュニケーションの現場でどのようにコントロールされているかを観る。第6節は、出来事のアイロニーを取り扱うが、この構造も、ことばのアイロニーと同様、「偽の構造」に還元できることを示す［例文(3)に関係］。第7節は、「世辞」や「謙遜」がアイロニーの構造とどのように関わるかを考察し、アイロニーの周辺の言語事象を整理する。第8節は、以上の考察により、例文(1)〜(4)の言語事象がアイロニーの認識構造において密接に関わることを確認する。

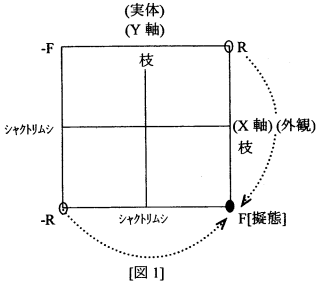
## 2．SimulationとDissimulation

一つのエピソードから始めよう。春先に庭の鉢植のテッセン（クレマチスともいう）の芽が少しふくらんできた頃の話である。ご承知のように、テッセンは冬は落葉し、つる状の枝はまるで鉄線そっくりであることからその名がある。一雨ごとに大きくなるはずの新芽が何日経っても一向に大きくならない。新芽をよく見ると虫に食べられたような形跡があるが、枝は枯れ枝以外どこを見ても虫らしいものは見当たらない。しかし、よくよく見ると、実はその枯れ枝が犯人であることが判ったのである。シャクトリムシである。木の枝そっくりにからだを反らし、演技している。枝を揺するとますます上手に演技する。

シャクトリムシが木の枝そっくりのふりをする。これがsimulation（擬態）である。simulationを辞書で引くと、「まねること、ふりをすること、偽ること；仮装、見せかけ」（『研究社英和大辞典』）とあり、a simulation of sleepには「たぬき寝入り」の訳がついている。「そうでないのにそうであるふりをする。」これがこの語の中心的な意味であるといってよい。

ところで、「そうでないのにそうであるふりをする」には、相反する2つの対立概念が内含されている。「実体」と「外観」である。なぜなら、「（実体は）そうでないのに（外観は）そうであるふりをする」と言えるか

らである。シャクトリムシの例で言うと、「(実体は) 枝でないのに (外観は) 枝のふりをする」ということになる。実体と外観は、それぞれ枝の場合とシャクトリムシの場合があるので、組合せは4通りあることになり、この関係を図示すると次の図1のようになる。

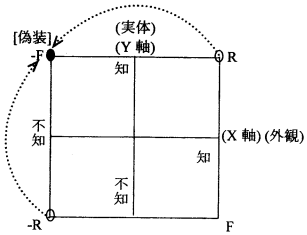


[図 1]

Rは実体も外観も枝の場合、－Rは実体も外観もシャクトリムシの場合、Fがここでいう擬態、つまり実体がシャクトリムシでありながら外観が枝の場合である。一見したところRに見えたが、実際は－Rの存在であり、Fの姿が暴露された、ということになろう。点線の矢印はこの関係を示したものである。なお、－Fはシャクトリムシそっくりの枝の場合である。確率は低いであろうが、ありうるケースである。

さて今度は、シャクトリムシが木の枝そっくりのふりをしていることに気づいた私の方はどうであろうか。普通一番ありそうなケースは、驚きのことばを発しながらシャクトリムシを取り除き、処分してしまう場合である。しかしもう一つ考えられるのは、擬態を見抜いていながら気づかぬような口振りで、相手の外観に合わせて「見事な枝だなあ」などと言いつつ、枝を揺すってシャクトリムシをからかうような場合であろう。この場合は相手の擬態を「知っていて知らぬふり」をしている。つまり、「そうであるのにそうでないふりをする」場合で、これがdissimulation (偽装) である。dissimulationを辞書で引くと、「しらばくれ、偽り、(感情、動機などの) 偽装、ねこかぶり」(『研究社英和大辞典』) とある。この場合も、実体と外観がそれぞれ知っている場合と知らない場合があるので、組合せは4通りとなり、図示すると次の図2のようになる。

Rは実体も外観も知っている場合、－Rは実体も外観も知らない場



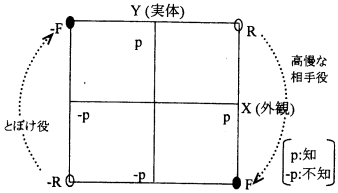
[図 2]

合、－Fが知っていて知らないふりをする場合で、これが dissimulation（偽装）にあたる。外観は－Rのように振舞うが、実際はRの存在であって、結果として－Fの姿をしていることになる。点線の矢印がこの関係を示している。因みにFであるが、これは知らないのに知っているふりをしている場合であり、上に述べた simulation のケースに当たる。こう見てくると、simulation と dissimulation は外観と実体に関しまったく逆の関係、つまりFと－Fの関係にあることが分かる。

以上の考察を基礎においた上で、次にアイロニーの原義に立ち返ってみよう。研究社『新英語学辞典』の irony の項には次のような説明が見られる。

> irony (←Gk *eirōneía* simulated ignorance)【修】（アイロニー、反語）
> ギリシャ喜劇に登場する伝統的なとぼけ役（Gk *eírōn*）は、常に大言壮語する高慢な相手役（Gk alazón）に対して、わざと無知を装い、負け犬の如く振舞いながら、実はそれとは裏腹の機知を働かせて、最後には相手を打ち負かす。すべてのアイロニーは、この eírōn の性格、すなわち、知りつつ空とぼけて無知を装う態度、表面に現われた言説と、それとは裏腹の真意との決定的な相違、という要素を含んでいる。alazón が eírōn にしてやられるという結末は、alazón の、あるいは観客の意表をついたドンデン返しであり、弱者が強者であり、強者が弱者であるという逆説（PARADOX）は、アイロニーを形成する根本的な要件たる外観（appearance）と実体（reality）の対立という観念を示している。（下線は筆者）

これによると、irony の原義は “simulated ignorance”（無知を装うこと）である。装っているので実際は知っていることになる。実際は知りながら、無知を装う態度がアイロニーだとすると、相手に合わせながら発することばや行動はすべてアイロニーの一部となる。つまり、相手の simulation（擬態）を見抜いた上で、無知を装い相手の言動に合わせていく態度が dissimulation（偽装）、つまり、アイロニーということになる。そうすると、シャクトリムシと気づき、その実体を見抜いた上で相手の姿に合わせてからかうように述べた「見事な枝だなあ」という表現は、紛れもなく典型的なアイロニーの表現ということになるであろう。



[図 3]

話を引用のギリシャ喜劇に戻し，次の図3を用いながら説明すると、とぼけ役は一見－Rのふりをしながら最後には相手を打ち負かすことで、実際はRの存在であったことを自ら示し、結果的には－Fの姿であったことが明らかになる。他方、高慢な相手役はRのふりをしながらも次第に－Rの存在であることが暴露され、結果的には、Fの姿であったことが明らかになる。矢印の点線はこの両者のドンデン返しを説明している。

Plato の Dialogues（『対話篇』）の Socrates は、ソフィストたちに対してとぼけた役を演じ、最後に相手の無知を暴露する。これは「ソクラテス的アイロニー」として知られるものである。ギリシャ喜劇に限らず、この種のドンデン返しの構造は、現代のTVや映画のストーリーで頻繁に用いられる構造である。卑近な例では、「刑事コロンボ」シリーズの刑事コロンボ（とぼけ役）と犯人（高慢な相手役）の関係があてはまる。そう言えば、水戸黄門シリーズや遠山の金さん等の物語も類似した構造と見てよいだろう。

## 3.「皮肉を言う」ということ

前節では、アイロニーの原義に従って、相手の実体を見抜いた上で気づかぬふりをし、相手の外観に合わせた表現をしたとき、それがアイロニーの表現となりうることを見た。この節では、まずこの原則を日本語の実例で確認した後、「皮肉を言う」ということの二義性について述べる。まず次の例を見てみよう。

(5) 昆虫採集で子供が捕虫網を不器用に振りまわし、蝶を逃がしたのを見て、
父「そんなやり方じゃだめだよ。こうするんだ、よく見てなさい。」
父親も失敗して蝶を逃がしたのを見て、

子供
- A
  - a.「なるほど、そうするわけ。」
  - b.「なかなかうまいね。」
  - c.「あ、採れた！」
  - d.「さーすが。」
- B
  - a.「なーんだ、失敗したじゃない。」
  - b.「下手だなあ。」
  - c.「そら、逃げられた！」
  - d.「なーんだ。」

すぐ分かるように、Aグループがアイロニーの表現で、Bグループが直接記述の表現である。問題は、Aの各表現が何を基準に生成されているかである。結論から言うと、Aグループの表現は、父親が蝶採りに首尾よく成功したとき発せられる類の表現である。言い換えると、成功したときに用いられる表現なら何でもアイロニーの表現となりうる。勿論、実際は見事に失敗しているので、成功は単なる「期待」（つまり先行認識、外観）にすぎず、「下手だった」という「結果」（つまり現実認識、実体）と著しい（反対関係的な）コントラストを成す。つまり「下手だ」という実体を見抜いた上で、父親の外観に合わせた表現を述べていて、これは前節で見た

アイロニー生成の原則と一致する。

これに対して、Bグループの表現はいずれも現実認識や実体認識に合わせた表現である。従来、アイロニーの表現は「思っていることの逆を言う」などとよく言われるが、正確には、アイロニーの表現は先行認識や外観認識を直接述べているのである。従って「思っていることの逆」ではなく、まさしく「思っていること」を述べていることになる。「(外観認識とは逆の) 実体認識を心に抱きつつ、外観認識を口にする」というのが正確なアイロニー表現の分析であろう。

次に「皮肉を言う」ということの二義性に触れておきたい。「彼は私に皮肉を言った」という場合の「皮肉」は、2つの意味で曖昧である。一つは、上で述べた「実体認識を心に抱きつつ、外観認識を口にする」という意味のアイロニーの発話を行うことである。これは発話行為論のことばで言えば、発語内行為 (illocutionary act) にあたる。もう一つの意味は、「あてこすり」や「いやみ」の意味である。これは聞き手の心に与えた効果を表すもので、必ずしも「実体認識を心に抱きつつ外観認識を口にする」必要はなく、普通の事実表現でも十分「あてこすり」や「いやみ」の効果を聞き手に引き起こすことができる。発話行為論の概念で言うと、発語媒介行為 (perlocutionary act) にあたる。この2つの意味を明確に区別することが大切である。

このことに関係して、『大辞林』の「ひにく (皮肉)」の項には、次のような説明がある。

---

ひにく [皮肉] [Ⅰ] ①皮と肉。転じて、からだ。②骨や髄まで達しないところ。表面。うわべ。... [Ⅱ] ①相手の欠点や弱点を意地悪く遠回しに非難すること。また、その言葉やさま。あてこすり。アイロニー。「——を言う」「——な笑い」②...

上で述べた発語内行為としての「皮肉を言う」の「皮肉」は、[Ⅰ]②の意味にあたり、骨や髄（reality）に対してうわべ（appearance）の意味である。従って「皮肉を言う」は「うわべのことを言う」ことであり、日本語でも外観認識が言語化されることが確認できる。また、発語媒介行為としての皮肉は、[Ⅱ]①と考えてよいであろう。

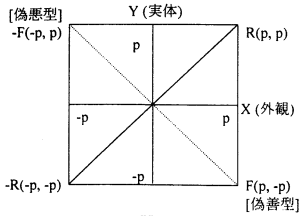
## 4．偽善型と偽悪型

前節では実体認識（または現実認識）を心に抱きつつ、外観認識（または先行認識）を口にするのがアイロニーの表現であることを見てきた。この節では、典型的なアイロニーの表現に2つのタイプを区別し、各々の特徴を述べる。

ある事象に対する実体認識が、たまたま外観認識の正反対であったとき、私たちはこの落差に驚く。pだと思っていたら－pだった。逆に、－pだと思っていたらpだった。[ここでpと－pは何らかの評価を表す尺度の極性表現とする。] この落差の認識を「アイロニーの認識」と呼ぶ。この落差は、嬉しいこともあるし、腹立たしいこともある。この認識を言語化したのが「アイロニーの表現」である。そして、その言語化の際働いていると思われるのが、先程述べた「実体認識を心に抱きつつ、外観認識を口にする」という原則である。

外観認識と実体認識のズレの組合せは、pと思っていたら－pだった、－pだと思っていたらpだった、の2種類考えられるが、これを明示的に図で表したのが図4である。

今仮にp＝good，－p＝badとすると、F点は外観はgoodだが、実体はbadという認識点を表す。このFの認識をアイロニーの表現として言語化するには、実体認識badを心に抱いて外観認識を言語化すればよいので、(1)「Bはほんとにいい男だ」のような表現となる。これが偽善型



[図 4]

アイロニー（blame-by-praise 型）である。外観が bad だが実体が good、例えば、外観は悪事を働く悪代官と商人だが、実体は互いに暴利をもたらすよき仲間の場合、「備前屋、お主も悪よのお」「いいえ、お殿様こそ」のような表現が対応する。これが偽悪型アイロニー（praise-by-blame 型）である。いずれの場合も、実体認識を心に抱きつつ、外観認識を口にしている。

偽善型はごくありふれたアイロニーの典型であるが、偽悪型は注意して探さなければなかなか気がつかない。次にいくつかの例を挙げる。

(6) できそうもないと思われていた仕事を無難にこなした人を形容して、「ずるいやつやな」／「にくいやつやな」と言う。

(7) 悪徳役人が目付の役人に「そでの下」を渡した時、それを受け取りながら、「この無礼者め」と言って笑う。

(8) 父親のお祝いのために、子供がお金を出しあってプレゼントをする。その時父親が「下らんことにお金をかけよって」と言う。

(9) 誘われたり、おだてられたりすると、「いやだあ」と言って喜ぶ。

(10) 「もうあなたってしようのない人ね」／「おまえ、ばかだなあ」

(11) 悪友に「また悪い奴がやって来た」と嬉しそうに言う。

偽善型は、社会的に認められる好ましい外観の裏に、その反対の実体が潜むケースが多い。これに対し、偽悪型は、社会的に認められない状況 (7)、表だっては気恥ずかしいケース (9、10)、相手の力を素直に認めたくない場合 (6)、表だっては照れくさい場合 (8)、悪友の場合 (11) などの外観認識の裏に、話者にとって好ましいと判断できる実体が隠されているケースである。従って、おのずから社会的には限定された、閉じられた人間関係の中

で発話されることが多くなるのが特徴と言えよう。

## 5．隠されたアイロニー

私たちの日常会話ではさまざまなことばがダイナミックに行き交うが、アイロニーに関して言うと、偽善型のような典型的なタイプよりも、むしろ一見何気ない表現でありながら、その裏にアイロニーが隠されている場合がよくある。次の例もそのケースである。

⑿　近所にうるさく騒ぐ子供がいたりすると、「お宅の坊ちゃんは元気がよろしいですね」などと言う。

この「元気がよろしい」は２つの意味で曖昧である。

①　元気がよくてよい。(「元気がない」の反対。本来の意味。)

②　元気がよすぎて悪い。(「他人迷惑な」の意。隠された意味。)

この例の面白いところは、①の意味が表面的には「元気がない」と対立関係にあると見せかけて、隠れたところで②の意味と対立関係を持ちうるところである。⑿の場合は２つのケースが考えられる。一つは単純な場合で、①を文字通り本来の意味で用いる場合。これは問題はない。もう一つは、話者Ｓが子供の実体認識を②と思い込んでいて、子供の元気な外観認識に合わせて①の意味で発話したケースである。この場合は、「悪い」と思っていて「よい」と言うのだから、明らかにアイロニーの構造が成り立っている。ところがこの構造を聴者Ｈが理解するかどうかは別問題である。次の⒀では、話者Ｓのアイロニーの意図を聴者Ｈが理解していないケースである。このような反応をされると、Ｓの方はもう一歩踏み込んだアイロニーの表現をたたみかけたい気持ちに誘われる。

⒀　Ｓ「お宅の坊ちゃんは元気がよろしいですねえ。」

H「そうなんです。健康だけが取り柄なんです。」

これに対し⒁は、Hがアイロニーの構造を理解したと考えてよい反応をしている。これを聴いたSは伝達目的が達成されたと判断し、直ちにアイロニーの意図はないことを明言し、その場をつくろっている。

⒁ S「お宅の坊ちゃんは元気がよろしいですねえ。」
H「そうなんです。ご迷惑をかけてすみません。やかましいでしょう。」
S「いいえ、そんなつもりで言ったんじゃないんですよ。子供は健康なのが何よりですからねえ。」

実際の言語生活は、この種のアイロニーに満ち溢れていると言ってよい。ポイントは、こうした微妙なやり取りの中にもアイロニーの構造とメカニズムが働いていることである。

この種の隠れたアイロニーとして用いられることばは、他にも沢山ある。「熱心な」(熱心な／熱心すぎる)、「落ち着きがある」(落ち着いている／じれったい)、「まじめな」(まじめな／融通がきかない)、「親切な」(親切な／おせっかいな) など、良い意味と悪い意味とが対立関係を成す可能性がある場合は、このグループに含まれる。

## 6．出来事のアイロニー

典型的な出来事のアイロニーは、Sophocles の *Oedipus* であろう。自分がたどる運命を知らず、自分が「よし」と思って選んだ行動が自らの破局を導いた悲劇である。これを「ソフォクレス的アイロニー」あるいは「悲劇のアイロニー」と呼ぶ。自分が予期したもの、期待したもの、当然のなりゆきと思ったことが、長い時間を経て、ことごとくその逆の結果を

生むという構造が見てとれる。つまり、pと思われたことが－pに、－pと思われたことがpの結果に終わり、ここでも外観と実体の反対関係的な偽の構造、つまりFと－Fの構造が抽出できるのである。

出来事のアイロニーは、何も「悲劇的アイロニー」や「運命のアイロニー」、「宇宙的なアイロニー」などに限られたものではなく、私たちの日常の言語表現にもたくさん観察できる。

(15) 日本人がご多分にもれず、自然破壊に手をかしたことは、彼らの自然愛好癖を思えば、皮肉というほかない。(ライシャワー著・国弘訳『ザ・ジャパニーズ』)

(16) 学内において強力な地盤を築き上げ、将来は医学部長、学長をも望めるコースを歩んでいた池園教授をつき落としたのは、自分が手紙を出して帰国させた旧友であった。人生の皮肉というべきか。(『週間朝日』)［河上（1984)］

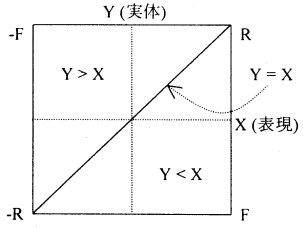
(3)の「皮肉にも」や、ここで用いられている「皮肉」は、出来事の流れの認識構造の中に、Fまたは－Fの構造が観察できることをメタ的に述べた表現といってよい。

## 7．アイロニーの周辺

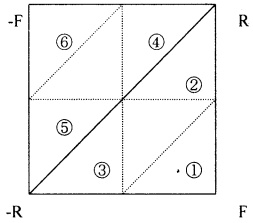
アイロニーを取り巻く関連語彙については、河上（1993b）で詳しく述べた。この節では、その要点を述べるに留める。

下の図5において、これまでの議論ではR，－R，F，－Fの4点にしか注目してこなかったが、実はその他の空間も重要な意味をもつ。実体認識軸をY軸とし、外観認識（表現）軸をX軸とすると、Y＝X線上は、実体と表現が一致している領域となる。これに対し、それ以外の空間、つまりY≠Xの領域（図5の四角のY＝X以外の空間）は、すべて実体と表現

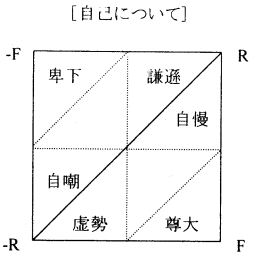
がズレている部分ということになる。最大のズレを表す点がFと－F点である。Y＞Xの領域は過小表現、Y＜Xは過大表現の領域である。さらにこの空間を細区分したのが図6である。①は実体とは逆に高く言う表現、逆に⑥は実体とは逆に低く言う表現の領域である。②は十面を高く言う表現、④は十面を低く言う表現という具合である。表現は、自己についてと他者について述べられるので、それぞれの場合について①～⑥の表現を調べたところ、図7と図8のような結果がまとまった。



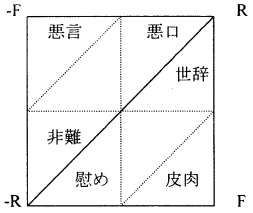

[図 5]




[図 6]




[図 7]




[図 8]

世辞は、②の位置を占め、他者の十面を高く言う表現である。表現と実体のズレ幅が広がり、偽の象限に入ると，偽善型のアイロニーである皮肉の領域に入ってしまう。一方、謙遜は、④の位置を占め、自己の十面を低く言う表現である。この場合も表現と実体のズレが広がると、卑下の領域に入り、偽の性質が強くなり、偽悪型のアイロニーの色彩を帯びる。

図7と図8は、自己と他者に関して対称的な関係にある。また、それぞれの図の中で、位置的に対称をなすものは、その value もまた対称をなしているはずである。

## 8．結語

本稿は、序で挙げた4つの言語現象に共通する要素を求めて議論してきた。いずれの現象も、私たちの心の中にある「外観認識と実体認識の間の反対関係的な偽の構造」に還元できるものであることを示してきた。

最後に述べておきたいことは、本稿で用いてきた「外観」や「実体」の判断は、認識主体の心の中での判断であり、決して客観的なものではない。話者が自分の主観の世界でズレを認識すれば、偽の構造が構成され、それに基づいてアイロニーの表現が発話されるのである。

また、本稿で用いたR，－R，F，－Fの四極をもつ認識構造図は、アイロニーの構造のみに用いられるものではなく、人間の知的営みを司る知的枠組の基本スキーマと考えられることも付け加えておきたい。

＊本稿は平成9年11月28日、近畿大学Eキャンパス文芸学部新校舎301教室で開催された近畿大学文芸学部「第8回英米文学専攻講演会」の草稿「アイロニーのからくり」に加筆・修正を加えたものである。

**【参考文献】**

Cole, Peter (ed.) (1978) *Syntax and Semantics*, Vol.9, *Pragmatics*. New York: Academic Press.

——— (ed.) (1981) *Radical Pragmatics*. New York: Academic Press.

Grice, H. Paul (1975) "Logic and Conversation," in Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics*, Vol.3, *Speech Acts*, 41–58. New York: Academic Press.

——— (1978) "Further Notes on Logic and Conversation," in Peter Cole (ed.), 113–127.

河上誓作 (1979)「皮肉の構造」『英語青年』第125巻、第3号、100–101. 研究社出版.

——— (1984)「文の意味に関する基礎的研究」『大阪大学文学部紀要』第24巻、モノグラフ、大阪大学.

——— (1986)「認識の投影としての言語——トロープとアイロニーの場合」『英語青年』第132巻、第1号、1–6. 研究社出版.

——— (1988)「偽善型・偽悪型アイロニーと世辞・謙遜表現」『日本語・日本文化研究論集』(大阪大学文学部共同研究論集) 第四輯、23–64. 大阪大学.

——— (1993a)「発話行為とアイロニー」『英語青年』第139巻、第5号、228–230. 研究社出版.

——— (1993b)「Overstatement と Understatement——アイロニーを取りまく関連語彙の研究」『言語学からの眺望』(福岡言語学研究会編)、235–246. 九州大学出版.

Roy, Alice Myers. (1978) *Irony in Conversation*. Ph.D. Dissertation, The University of Michigan.

Searle, John R. (1969) *Speech Acts*. New York and London: Cambridge Univ. Press.

(文学部教授)